

二階堂トクヨの着衣観念の検討

—女性身体像理解を目的として—

鈴木 里 歩

はじめに

本稿では、明治大正期における女子体育指導者⁽¹⁾であり、今日の日本女子体育大学の前身「二階堂体操塾」の設立者である二階堂トクヨ（以下、二階堂と略）の着衣観念を明らかにすることを目的とする。ここで、二階堂の着衣観念に注目したのは、彼女の女子体育観が「良妻賢母の育成」という目的意識を根底に持ったものであり⁽²⁾、体育を通じて育成される女性身体とその着衣観念が不可分であると考えたからである。

二階堂は、1880年12月5日、宮城県生まれ⁽³⁾。福島師範学校、女子高等師範学校文科⁽⁴⁾を卒業後、石川県立高等女学校、高知県尋常高等師範学校での教員としての勤務を経て、1913年から1915年まで、文部省留学生として体操研究のためイギリスへ留学した⁽⁵⁾。帰国後は東京女子高等師範学校教授を経て1922年、二階堂体操塾（1926年に日本女子体育専門学校、現 日本女子体育大学）を設立し、女子への体操指導、学校運営、大会運営、講演活動等、女子体育の発展に尽力した人物である⁽⁶⁾。

これまでの二階堂に関する先行研究においては、その生涯における女子体育への貢献、女子体育観の観点から研究が進められてきた⁽⁷⁾。一方、筆者は現在、女性身体像⁽⁸⁾の観点から二階堂に関する研究を行っている。この研究の第一段階として、筆者は二階堂による女性身体像に関する記述資料を収集し検討を行ってきた。その結果、二階堂による女性身体像に関する記述資料は、その内容により、大きく次の5点に分類された。それは、(1) 筋肉に関するもの、(2) 瘦肥に関するもの、(3) 食事に関するもの、(4) 衣服に関するもの、(5) 健康に関するもの、である。本稿では、特に記述資料の豊富な(4) 衣服に関するものについて、特に二階堂の着衣観念を中心に検討したい。

二階堂は、自身の設立した二階堂体操塾の制服として「チューニック」を採用した。このチューニックは、二階堂の留学先であった「バーグマン・オスターパーク・フィジカル・トレーニング・カレッジ」(Bergman Österberg Physical Training College, 通称 キングスフィールド体操専門学校、以下、キングスフィールド体操専門学校と略)のユニフォームであった。このチューニックを採用した背景には、いかなる着衣観念があったのだろうか。本稿では、二階堂による衣服に関する記述資料を分析することで、その着衣観念を明らかにする。

近代日本の女子制服の変遷については難波に詳しい⁽⁹⁾。難波(2016)によれば明治期から昭和戦前期における女子制服の形態は、男袴（マチあり・足を左右に分かつズボン状）→和服（着流し）→

鹿鳴館洋装 → 和服（着流し）→ 女袴（マチなし・スカート状）→ 洋服という変遷を遂げている⁽¹⁰⁾。女子制服とは「各女子中等教育機関がそれぞれに⁽¹¹⁾規則として定めた服装」⁽¹²⁾である。明治初期から明治20年代にかけて、女子制服という制度が実施されていたのは、東京女子師範学校や各地に設置された師範学校の女子部の他に、華族女学校、キリスト教主義の女学校などごく一部の学校であった⁽¹³⁾。この背景について難波（2006）は、当時、女子の中等教育機関が教育制度として整備されていなかったためであると指摘している⁽¹⁴⁾。その後、1899年の高等女学校令（2月8日公布、4月1日実施）により女子中等教育機関が整備されると、これと連動するように女子制服制度も本格的な確立をみせ、東京の一部の私立学校や女子高等師範学校で着用されていた女袴が女子制服として全国に普及していった⁽¹⁵⁾。大正後期から昭和戦前期には、徐々に女子制服の主流が女袴から洋服とりわけセーラー服となっていた⁽¹⁶⁾。

このような女子制服の変遷の中で、本稿において取り扱う内容が該当する時期は、女子制服として女袴と洋服の着用が主流であった明治後期から大正後期である。

二階堂の着衣観念に関して言及した先行論文として、西村絢子（1983）がある⁽¹⁷⁾。西村（1983）は、二階堂による衣服に関する記述資料を列举し、それらには通底して「健康でのびやかな女子の身体づくり」という目的意識がみられると述べている⁽¹⁸⁾。

この先行研究に比して、本稿では、二階堂の着衣観念のより体系的な分析・検討を行いたいと考えた。そのために、この先行研究を参照しながら、筆者自身も、二階堂による衣服に関する記述資料の検討を行った。その結果、二階堂による衣服に関する記述資料は、その内容によって次の3点に分類された。それは、衣服と呼吸器に関するもの、女子制服に関するもの、チューニクの採用に関するもの、である。よって、本稿では、二階堂の着衣観念について、1. 衣服と呼吸器、2. 女子制服、3. チューニクの採用、の3点から考察を試みたい。

1. 衣服と呼吸器

二階堂は、著書『体操通俗講話』（1917）の中で、身体的精神的活動の原動力を生み出す器官を「薪屋さん」「鞆屋さん」「水道屋さん」と表現している⁽¹⁹⁾。「薪屋さん」は消化器、「鞆屋さん」は呼吸器、「水道屋さん」は循環器を表している。本稿では、この三器官の中でも、衣服への言及が為されている「鞆屋さん」（呼吸器）に関する記述部分を取りあげたい。

「鞆屋さん」について述べられている節では、呼吸器のはたらきとその重要性が説かれている⁽²⁰⁾。また、二階堂（1917）は日常生活において呼吸器のはたらきを妨げる要因として次のような場合を挙げている⁽²¹⁾。

彼多人数集会した空気の流通のよからぬ室にはいった時、窓しめきった電車汽車に乗った時、衣服の襟をひきつめたり、帯を高くきつくしめたりして胸を圧迫する時、何ぞ仕事をするために余儀なく不正な姿勢になる時、思をひそめて物を考うる時、皆鞆屋さんの努力を撲殺するのであ

ります（79 ページ。下線は筆者による。）

二階堂は呼吸器のはたらきを妨げる要因を上記のように挙げている。中でも衣服については、当時の女性たちの間で一般的に着用されていた和服の、襟と帯による胸への圧迫を挙げている。さらに二階堂（1917）は、和服の構造上の問題点を、次のように指摘している⁽²²⁾。

常住に厚い襟を幾枚も重ねて胸をきちんとかき合せ、其処へ持って来て殆んど乳の上から重い堅い幅の広い帯をまきつけ、後は肩甲骨の辺へ大きな帯枕をしょったおだいこ結びなんと云うのは問題になります。こうした婦人は二重胸廓を築き上げ、しかも上のは拡大も縮少も全く不可能の胸枷に外なりません、ここに至って日本婦人の忍耐と、辛抱とに感服せざるを得ないではありませんか、足枷、手枷は昔から苦しいものに決まっていますが、より苦しい胸枷にようまあ黙って辛抱がお出来になる事ですね、そりや恰好はよいかも知れませぬ、よい恰好をしてと思う気持ちは、また格別なものなんでしょうけど実に夫れは胸枷なんですよ、燃えてる命の火に水をかける様な毒手なんですよ。（132～133 ページ。）

上記で二階堂は、襟、帯、帯結びを「胸枷」のようであると言いつづけている。「枷」とは、「行動の自由を奪うために首や手足にはめる、昔の刑罰の道具」⁽²³⁾である。よって「胸枷」とは、「胸にはめ、その自由を奪うもの」という意味であると解釈できる。ここから二階堂は、襟、帯、帯結びを「行動の自由を奪うために胸にはめられる枷のようなものである」ととらえていたことが分かる。さらに、それは「燃えてる命の火に水をかける様な毒手」⁽²⁴⁾であると述べている。「毒手」とは、「危害を加えたり損害を与えたりしようとする、相手の悪だくみ」⁽²⁵⁾という意味である。これらの点を踏まえると、二階堂は当時の衣服について、襟、帯、帯結びという「胸枷」を着用することにより、着用者自身の生命を害しているという点を問題視していたことが分かる。

2. 女子制服

前節では二階堂の考える衣服と呼吸器の関係をみた。この衣服と呼吸器の関係を踏まえ、二階堂は女子制服についても自身の論を展開している。以下は、二階堂（1917）が当時の女子制服について、その問題点を具体的に指摘したものである⁽²⁶⁾。

さて現今用いて居りますところの女生徒の服装を一々分解して見ますと、

第一、厚く苦しい襟をきちんと掻き合わせるので、丁度胸を斜十文字に縛り上げる態になります。

第二、胸高に袴のひもをしめるので、斜十文字の縄目の上に、更に一層の胸枷を嵌める事になります。

第三、肌ひも、腰ひも、たくり、袴下、なんと云う様な帯紐類で腰枷、腹枷胸枷をこしらえ、容赦もなく胴体を禁錮してしまいます。

第四、かように上半身即ち胴体を武装しながら、之れは又何とした開放主義の下半身、腰から下はまるであんどん包みです、此のだらしの無い下半身の服装は、風教上から、別して女学生の体育上から見て実に憂うべきものです。

第五、まちのある袴、まちの無い袴、或はあんどん袴、くくり袴等種々なる袴がありますが、何れも一得一失誠に思わしくありません、何にせ此の部が極端なる開放主義なので、罪もない袴までが余計な批難を余儀なくされねばなりません、一体女の脚、特に膝に対する訓練は実に大切なものです、故に体操でも作法でも常に此処に懸命の努力を注がねばなりませんのです、それにつけては、この辺をすっかり包んでしまう袴はすべて此の目的にかないません。

第六、袖がまた難物です、筒袖は割烹や水仕事に不便です、余程うまく袖口をまくらないと水びたりになってしまいます、元禄袖はまさかの時に襷かけるに短くすてて置くに長し、中途半端のたもとが如何にも始末におえませぬ、長い袖はたすきがけてしまえば甲斐甲斐しくなりますが、余計な荷物が大事な背中に出来て一層の猫背を構成します。

第七、小やつがまた厄介ものです、あればあけたで腋の下が見えるし、無ければないでひきつめられるし、困ったものです。

以上申しのべた七ヶ條の非難は、現在我国女学生が着ている衣服が有する欠点です、こう云う数々の欠点を有する衣服に咀われて居るのですもの、そりゃ、何につけ非常に損害をうけつつあるはあたりまえです、女学生たるもの此の点に向かって警戒する所無くば、ついに来るべき運命は滅亡です。(722~724 ページ)

この記述がなされた 1917 年当時は、女子制服として主に女袴が着用されていた⁽²⁷⁾。二階堂はこの女袴を一つ一つ分解し、襟、帯紐類、袖、袴といった各部分からその問題点を指摘している。

さらに続けて、二階堂（1917）は「体育中の一大要件をなす衣服が此の如く思わしくない有様ですから、現在の女学生が弱いわけです、従って此女学生時代を過した婦人は若くてドンドン死ぬんです！」⁽²⁸⁾と女学生の制服改良の必要性を訴えた。その結果、二階堂自らが制服を考案するに至った。二階堂（1917）が考案した制服は次のようなものであった⁽²⁹⁾。

此つたなきものは、先づ胸枷を全然とりすて、そして胸元は打見たところ襟を重ねてかき合わせた様です、袖はシャツ式にして小やつをあけず、どんなに手を上下しようと上体を動かそうと、乃至は頭をまげようと、胸はゆっくりしたもの、袖も亦いささかつかれませぬ、この辺苦心したところでは、腹の辺から下は袴になって居ります、袴の裾はまくり込むようにして、其長短を任意にこしらえ得ます、帯は恰も袴の後ひもだけあるようなものです。

着た処は袖のすこし変った和服に、袴をはいたと同様な外見になります、之れが即ち上っ張り

です。

此上っ張りの下には、春夏秋冬に依って夫れ夫れ手加減した肌着様の物を、幾枚でも随意に着込むのです、肌着の丈は腰きりとして、おなか辺からは「(原文ママ) 股引でもない、猿股でもない、又ズボンでも無い一種独特のものはきます、私は之れを「したの肌着」と申して上半身に用うる「上の肌着」と対にします、下の肌着は之れ亦寒暑に対する手加減が出来、且つ何枚でも勝手にはく事が出来ます、この丈は膝の上までを適度とします。

膝の上からは脚半をはいて脛を包みたいものです、または靴下をはくを咎めず、足は足袋ばき、下駄でも差支はありませぬ、靴下は腰部から靴下吊りでつる必要があります。

下をこう武装して置いて、上にらくな上っ張りを着る時、体育上から申しても、又は他の方面から申しても実に都合がよろございます、そして之れは単に体操科の時のみならず、何の学科にでも結構、又道ゆく時にも電車の中でも余り人目をひきませぬ、夫れに羽織やコートなんかを着ますと、只今の通常服とさっぱりもう変った事はありません、しかも其内容に至っては非常な変化です。(726～728 ページ。)

二階堂の考案した制服は、外面的には従来の「和服に袴」と共通する点もあるが、機能面に目を向けると従来の制服との違いが見えてくる。それは、襟をゆったりと重ねることで胸元にゆとりをもたせている点、袖がコンパクトなシャツ式であるため動きやすい点、袴の長さの調節が自由自在である点、帯が簡素なため胴体への締め付けがゆるい点、下半身にも肌着を用いることで風教上考慮している点である。これらは二階堂が従来の制服について、体育の観点から分析し、改善した点である。また、この制服が和服式であるのは、大和民族の特有性を失いたくないという二階堂の思いからであった⁽³⁰⁾。ちなみに、二階堂は1916年10月23日に貞明皇后が東京女子高等師範学校に行啓になった際⁽³¹⁾に、この制服を着用した生徒たちによる体操を披露している⁽³²⁾。

本稿冒頭でも述べたが、難波(2016)によれば明治期から二階堂が上記の女子制服を考案した1917年に至るまでの大まかな女子制服の形態は、男袴(マチあり・足を左右に分かつズボン状)→和服(着流し)→鹿鳴館洋装→和服(着流し)→女袴(マチなし・スカート状)という変遷を遂げている⁽³³⁾。この、和服(着流し)から女袴への変容に特に影響を与えたのはお雇い外国人のドイツ人医師 エルヴィン・フォン・ベルツ(以下、ベルツと略)であった⁽³⁴⁾。ベルツは1899年5月13日に女子高等師範学校講堂で行われた私立大日本婦人衛生会例会において「女子の体育」と題する演説を行い、医学的見地から女袴の着用を推奨した⁽³⁵⁾。この後、女袴は女子制服の形態として全国的な普及をみせた⁽³⁶⁾。

しかし、一口に女袴といっても、各学校の規程や着用者の着こなし⁽³⁷⁾によっては、医学的に理に適わないものと化していた場合もあったと推察される。それは、本稿でこれまでみてきたように、1917年発行の二階堂の著書において「当時の女子制服に対する指摘」が為されている事実からみえることだろう。二階堂(1917)は、そのような現状に対して、「どうしても、此ままではなりませ

ぬ、娘を学校に出すのはよく教育してもらいたいからでしょう、処が今の服装では思う存分教育を施す事が出来ないんです、ですから苟も中等教育でも受けさそうと思う親御は、今、服装上に於いて思いきった処置に出なければ、大事な子宝をだい無しにします」⁽³⁸⁾と訴えている。この記述から、二階堂は女子制服において、「存分に教育を施すことが出来、また存分に教育を受けることが出来る服であるべきだ」という点を重要視していたことが分かる。

3. チューニックの採用

二階堂は、二階堂体操塾（以下、塾と略）の制服としてチューニックを採用した。チューニックは、二階堂の留学先 イギリスのキングスフィールド体操専門学校のユニフォームであった⁽³⁹⁾。当校校長であったマルチナ・バーグマン・オスターパーク（以下、オスターパークと略）は、全身の調和的発達を望ましいものと考えており、衣服もゆるやかなものを理想としていた⁽⁴⁰⁾。1893年頃、当校学生の1人のミス・テイトがチューニックを考案し、オスターパークはこれを当校のユニフォームとして採用したのであった⁽⁴¹⁾。

二階堂が塾の制服として和服ではなくチューニックという洋服を採用した背景には、二階堂の洋服に対する意識の変化があったと推察される。前節でみたように、元来、二階堂は民族性保持の観点から、和服式の制服、という点にこだわりを持っていた。そのため、開塾当初も服装についての規定は特になされておらず、生徒のほとんどは和服を着用していた⁽⁴²⁾。しかし、やがて二階堂は洋服の優



図1 チューニック

（二階堂トクヨ『体操通俗講話』東京宝文館，1917年。）

れている点を認めるようになり、チューニックを塾の制服（日常服及び体操服）として採用するに至った⁽⁴³⁾。西村（1983）によるとその特徴は、「胸の拡大縮小が自由に出来るように、胸に十分ヒダをとってあることであり、そのヒダは裾にまで及んでいる。……上下の切りかえがない点でエプロン風であり、腰にはゆるやかに結ぶベルトがついていて締め方も自由にできるようになっている」⁽⁴⁴⁾とある。また、ベルトについて二階堂学園六十年史（1981）によると「肋木に逆さにぶら下がる様な場合には、裾に近い方にベルトをしめ、チューニックのスカートが落ちてくるのを防いだ」⁽⁴⁵⁾とある。このチューニックは胴体部分への締め付けがほとんどなく、作りもシンプルであり、二階堂の考案した和服式女子制服と比較すると、身体動作や身体機能への負担が大幅に軽減されたとみてとれる。

このような構造を持つチューニックの採用によって、塾のみにおいてはあながち、二階堂の指摘してきた衣服の抱える問題点は緩和されたといえる。まず、本稿第1節でみたように、二階堂は、呼吸器機能の観点から、襟や帯、帯結びによる胸部への圧迫を問題点であると指摘してきた。これについては、胸元にゆとりのあるチューニックの着用によって取り除かれることとなった。また、本稿第2節でみたように、二階堂は、非衛生的な制服の着用によって生じる教育場面での支障を問題視してきた。これについても、胴体部分への締め付けがゆるく、身体機能・動作への負担が少ないチューニックの着用によって改善されたといえる。

おわりに

本稿では、近代期女子体育指導者 二階堂トクヨの着衣観念について、①衣服と呼吸器、②女子制服、③チューニックの採用、の3点から検討した。その結論は以下の通りである。

- ①衣服と呼吸器—二階堂は、和服の襟、帯、帯結びといった「胸枷」により胸が圧迫されることで、呼吸器の正常なはたらきが妨げられていることを指摘している。また、「胸枷」を着用することは、まさに着用者自らの手で自身の健康ひいては生命を害する行いである、と強く訴えている。
- ②女子制服—二階堂は体育の面から、女子制服の襟、帯紐類、袖、袴を問題視し、このような女子制服着用による女性の早死を危惧した。その結果、二階堂によって考案された和服式女子制服は、襟がゆったりとして胸元にゆとりがあり、袖はコンパクトなシャツ式で動きやすいものであった。加えて、袴の丈は自由自在であり、帯は簡素で胴体への締め付けがゆるく、風教上を考慮し下半身に肌着を用いることが推奨されたものであった。また、二階堂は女子制服において、「存分に教育を施すことが出来、また存分に教育を受けることが出来る服であるべきだ」という点を重要視していた。
- ③チューニックの採用—二階堂は塾の制服としてチューニックを採用した。チューニックは二階堂の留学先 イギリスのキングスフィールド体操専門学校のユニフォームであった。チューニックの構造は上下の切りかえがないエプロン式であり、胸元から裾にかけてヒダが入っており、特に胸部周辺の縮小拡大が自在であり、腰を締めるベルトは基本的にはゆるやかな締め方でよいとされた。このチューニックは胴体部分への締め付けはほとんどなく、作りもシンプルであ

り、二階堂の考案した和服式女子制服と比較すると、身体動作や身体機能への負担が大幅に軽減されたことがみてとれる。

以上の3点を踏まえると、「チューニックの採用」は、二階堂の着衣観念の象徴であるといえる。チューニック自体は二階堂の考案した制服ではないが、女子生徒の制服としてチューニックを採用したという事実には、二階堂の着衣観念がよく表れている。なぜなら、「チューニックの採用」という事実の背景には、「これまで和服式制服であることにこだわっていた二階堂が、そのこだわりを脱ぎ捨てて洋服式制服の採用に踏み切った」という、二階堂の意識に基づいた選択行為が読み取れるからである。では、なぜ二階堂は洋服であるチューニックの採用に踏み切ったのだろうか。まず、本稿でみてきた二階堂の記述を踏まえれば、そこには、従来の衣服及び女子制服においてみられた「枷」を取り払うことで、「呼吸器機能が正常にはたらき健康で、かつ自由な動作を妨げられることのない身体」、つまり「存分に教育を受けられる身体」にしたいという二階堂の切なる思いがあったと推察される。また、本稿でみてきた二階堂の記述を踏まえれば、彼女は女子制服の改善を喫緊の課題としてとらえていたことが分かる。例えば、本稿第2節でとりあげた二階堂の記述の中での、「若くてドンドン死ぬんです！」⁽⁴⁶⁾や「どうしても、此ままではなりません」⁽⁴⁷⁾という言葉からは、彼女の、女子制服改善という課題に対する緊要性が読み取れる。よって、二階堂はこの課題を至急解決すべく、洋服であるチューニックの採用を断行したと推察される。

本論では、二階堂トクヨの着衣観念について、その女性身体像理解を目的とした考察を行った。

「チューニックの採用」に象徴される、二階堂の着衣観念は、教育を受ける資本としての身体の健康の重要視にあったのである。

最後に、今後の課題として次の3点を挙げたい。

1点目は、二階堂の着衣観念を「女子体操服」の系譜の中でとらえることである。筆者は、二階堂の着衣観念が「女子制服」と「女子体操服」、どちらの系譜にも与することができると考える。その理由は、二階堂が自身の考案した「女子制服」を体操時に着用させたから、また制服として採用したチューニックを、体操時を含む常時着用させていたからである。これらの事実から、二階堂の着衣観念において「制服」と「体操服」の概念に線引きはなされていなかったとみえる。よって、本稿では二階堂の着衣観念を「女子制服」の系譜からとらえたが、今後は「女子体操服」の系譜からもとらえたい。そのためには、まず先行研究より「女子制服」と「女子体操服」の関係性を学ぶことから始めたい。

2点目は、二階堂によるチューニックに関する記述資料をあたることである。二階堂のチューニック採用について検討した本稿第3節は、その多くを先行論文に拠っている。本来用いるべきであった一次資料と呼ぶべき二階堂のチューニックに対する思いは、日本女子体育大学附属図書館所蔵の『わがちから』『体育写真画報わがちから』『体育写真画報ちから』『ちから』に記されている可能性が高い⁽⁴⁸⁾。しかし、これらの資料は現在閲覧ができる状況にあらず⁽⁴⁹⁾、本稿ではとりあげることができなかった。今後、閲覧が可能になった際、これらの資料を一次資料とし、二階堂のチューニック採用

に際しての考えを検討することで、その着衣観念のさらなる考察を行いたい。

3点目は、二階堂の着衣観念にみる「健康」の背景を明らかにすることである。本稿では、二階堂が呼吸器機能の観点から衣服と健康について論じていることを確認した。今後は、この「健康」の背景にあった二階堂の意図に関する考察を行いたい。

以上の3点を課題とし、今後も二階堂の着衣観念に関する研究を継続したい。

注(1) 本稿では、「女子体育指導者」を「体育を専門的に研究し、実際に体育の指導にも関わる女性」と定義する。

(2) 石井美晴「二階堂トクヨの著書」白田小夜子、吉田和子、森下千瑞、石井美晴、村山茂代『現代に生きる「すてきな女性」』不昧堂出版、2003年、146ページ。

(3) 詳細な誕生地は、宮城県志田郡三本木村字桑折（現 宮城県大崎市三本木）相の沢囲十八番地。（西村絢子『体育に生涯をかけた女性—二階堂とくよ—』杏林書院、1983年、7ページ。）

(4) 校名の変遷については、1875年の開校時は「東京女子師範学校」であったが、1885年に東京師範学校に合併され「東京師範学校女子部」となる。その後1890年に女子部が分離し「女子高等師範学校」となった。1908年、奈良女子高等師範学校の設置に伴い、「東京女子高等師範学校」と改称した。（お茶の水女子大学百年史刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』お茶の水女子大学、1984年、835～840ページ。）

(5) 前掲『体育に生涯をかけた女性—二階堂とくよ—』19～165ページ。

(6) 二階堂は、1941年7月17日胃癌のため60才で死去した。生前の功勞に対し、勲六等に叙せられ瑞宝章を賜っている。（同上、173～255ページ。）

(7) 同上、穴水恒雄『人として女として—二階堂トクヨの生き方—』不昧堂出版、2001年、等。

(8) ここでいう女性身体像とは「体型、体重、サイズ、姿勢をはじめとする容姿に関わる諸要因により形成されるもの」を指している。

(9) 難波知子「近代日本における女子学校制服の成立・普及に関する考察—教育制度・着用者・制服製作に着目して—」『人間文化論叢 第9巻』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、2006年。難波知子『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』創元社、2012年。難波知子『近代日本学校制服図録』創元社、2016年、等。

(10) 前掲『近代日本学校制服図録』63～160ページ。

(11) 難波（2012）によれば、女子制服制度の実施は各学校の判断によるもので、文部省訓令等による全国統一の実施ではなかった。（前掲『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』138ページ。）

(12) 佐藤（1996）によれば、「学校制服は、戦前では主として高等教育機関（主として男性）と正規の中等教育学校（男女問わない）とで採用され、初等教育レベルでは『管内小学校ノ模範』と目されていた師範学校附属小学校や私立大学附属小学校など、ごく一部の学校に限られていた」とある。（佐藤秀夫『日本の教育課題＜第2巻 服装・頭髮と学校＞』東京法令出版、1996年、5ページ。）

同様に難波（2016）も、公立小学校では服装規定による一律の制服着用は基本的には成立し得なかったとしている。また、その背景には就学率を高め維持することを第一優先としていた教育行政の、貧困家庭に対する配慮があったのではないかと指摘している。（前掲『近代日本学校制服図録』162ページ。）

(13) 前掲「近代日本における女子学校制服の成立・普及に関する考察—教育制度・着用者・制服製作に着目して—」『人間文化論叢 第9巻』42ページ。前掲『日本の教育課題＜第2巻 服装・頭髮と学校＞』226～236ページ。

(14) 前掲「近代日本における女子学校制服の成立・普及に関する考察—教育制度・着用者・制服製作に着目して—」『人間文化論叢 第9巻』42ページ。

(15) 同上、43ページ。

(16) 前掲『近代日本学校制服図録』66ページ。

- (17) 前掲『体育に生涯をかけた女性—二階堂とくよ—』162～168 ページ。
- (18) 同上。
- (19) 二階堂トクヨ『体操通俗講話』東京宝文館、1917 年、24～167 ページ。
- (20) 同上、75～147 ページ。
- (21) 同上、79 ページ。
- (22) 同上、132～133 ページ。
- (23) 山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄 編『新明解国語辞典 第六版』三省堂、2009 年、202 ページ。
- (24) 前掲『体操通俗講話』133 ページ。
- (25) 前掲『新明解国語辞典 第六版』1063 ページ。
- (26) 前掲『体操通俗講話』722～724 ページ。
- (27) 前掲『近代日本学校制服図録』63～160 ページ。
- (28) 前掲『体操通俗講話』724 ページ。
- (29) 前掲『体操通俗講話』726～728 ページ。
- (30) 二階堂（1917）は次のように記している。
「私共大和民族は万事他の国民と違った風俗習慣の下に、世界唯一の国を成して居ります、衣服とてもその通り、大和民族独特のものを持っています、故に之れは如何なる世にも此の本態を失いたくないものです、固よりどんな改良を加えてもかまいませんが、全然大和民族の特徴を減したくはありません。」
此の考に基いて私もおはづかしながら一の女学生服をこしらえました。
私は、英国人の『教育上に於ける国粹保存の事業』の数々を見まして、実に発憤致しました、そこで我が邦女子の体操服などは洋式服で無く、是非共所謂和服式のものをこしらえなければならないと存じました」（二階堂トクヨ『体操通俗講話』東京宝文館、1917 年、725～726 ページ。）
- (31) この日のことが『東京女子高等師範学校六十年史』（1934）には次のように記されている。
「大正五年十月二十三日 皇后陛下行啓
当日午前九時御出門、九時二十分着御。校長以下職員・生徒・児童及び来賓一同は奏楽裡に玄関前で奉迎えした。……
この日御巡覧の生徒課業は左の如くであった。……
左記合同体操を御覧遊ばされた。
体操 本校文科・理科・家事科第二学年 教授 二階堂トクヨ……
終って便殿に入御、暫時御休憩の上、午後三時四十五分御機嫌麗しく還御あらせられた。……
還御に際して再び校長を便殿に召され、特に左の意味の御沙汰があった。
一、本校の教育一般に進歩の状あり。又特に体育に留意する所あるをみる。……
返御の後、校長は文部大臣と共に直ちに参内の上御礼を申し上げた。……」（東京女子高等師範学校 編『東京女子高等師範学校六十年史』東京女子高等師範学校、1934 年、135～141 ページ。）
- (32) 前掲『体操通俗講話』726 ページ。
- (33) 前掲『近代日本学校制服図録』63～114 ページ。
- (34) 前掲「近代日本における女子学校制服の成立・普及に関する考察—教育制度・着用者・制服製作に着目して—」『人間文化論叢 第 9 巻』43 ページ。
- (35) 私立大日本婦人衛生会 編刊『婦人衛生会雑誌 第 115 号』1899 年、1～37 ページより、E. ベルツ「女子の体育」1899 年 5 月 13 日演説。
- (36) 高等女学校令の公布・実施とベルツの演説が為されたのは 1899 年のことでありこれ以降全国的女子中等教育機関において制服として女袴が普及していった。だが、これより前における女子中等教育機関での女袴の着用が一切無かったわけではない。跡見花蹊設立の跡見女学校では 1875 年から制服として女袴が常時着用されていた。また、華族女学校では下田歌子の考案により 1885 年から礼節を整えるための式服として女袴が着

用されていた。また、女子高等師範学校附属高等女学校では1898年に袴の着用が開始されていた。（前掲『近代日本学校制服図録』73ページ。）

- (37) 女袴に対する各学校の規程や着用者の着こなしについては難波（2006）を参照されたい。（前掲「近代日本における女子学校制服の成立・普及に関する考察—教育制度・着用者・制服製作に着目して—」『人間文化論叢 第9巻』44～46ページ。）
- (38) 前掲『体操通俗講話』731～732ページ。
- (39) 前掲『体育に生涯をかけた女性—二階堂とくよ—』131～132ページ。
- (40) 同上。
- (41) 同上。
- (42) 二階堂学園『二階堂学園六十年史』不味堂出版、1981年、108ページ。
- (43) 同上、108～109ページ。
- (44) 前掲『体育に生涯をかけた女性—二階堂とくよ—』167ページ。
- (45) 前掲『二階堂学園六十年史』110ページ。
- (46) 「さて現今用いて居りますところの女生徒の服装を一々分解して見ますと、……以上申しのべた七ヶ條の非難は、現在我国女学生が着ている衣服が有する欠点です、……体育中の一大要件をなす衣服が此の如く思わしくない有様ですから、現在の女学生が弱いわけです、従って此女学生時代を過した婦人は若くてドンドン死ぬんです！」（前掲『体操通俗講話』722～724ページ。）
- (47) 「どうしても、此ままではなりません、娘を学校に出すのはよく教育してもらいたいからでしょう、処が今の服装では思う存分教育を施す事が出来ないんです、ですから苟も中等教育でも受けさそうと思う親御は、今、服装上に於いて思いきった処置に出なければ、大事な子宝をだいたい無しにします」（同上、731～732ページ。）
- (48) 西村（1983）の調査によると、1982年1月1日の時点での日本女子体育大学所蔵の雑誌『わがちから』『体育写真画報わがちから』『体育写真画報ちから』『ちから』の号数は以下の通りである。
- 『わがちから』1巻8号（大正10年11月号）2巻1号（大正11年1月号）2巻2号（大正11年2月号）2巻3号（大正11年3月号）2巻4号（大正11年4月号）2巻5号（大正11年5月号誕生号）2巻6号（大正11年6月号）2巻7号（大正11年7・8月号）2巻7号（大正11年9・10月号）2巻7号（大正11年11年〈原文ママ〉12月号）2巻7号
- 『体育写真画報わがちから』3巻1,2号（大正12年2月発行）3巻3,4号（大正12年4月発行）3巻5,6号（大正12年6月発行）3巻8号（大正12年8月発行）3巻9号（大正12年9月発行）
- 『体育写真画報ちから』3巻1号（大正14年2月発行）3巻11〈原文ママ〉号（大正14年2月発行）3巻12〈原文ママ〉号（大正14年3月発行復活第3号）4巻1号（大正14年4月発行）4巻2号（大正14年5月発行）
- 『ちから』第51号（昭和2年4月発行）
- （前掲『体育に生涯をかけた女性—二階堂とくよ—』192～193ページ。）
- (49) 『わがちから』『体育写真画報わがちから』『体育写真画報ちから』『ちから』の閲覧について、所蔵先である日本女子体育大学附属図書館に問い合わせたところ「このような状況（COVID-19の流行）で、学外の方の利用はご遠慮している」との回答であった。（回答日2020年12月1日）